



おすすめの一冊

セルバンテス『ドン・キホーテ』

ニ
 ゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』を最近、岩波文庫の牛島信明訳で前編・後編、計6冊を通して読みました。以前、というより若い頃、前編を読んだはずなのですが、特に印象はなく、あまり記憶にも残っていないので、もしかしたら最後まで読み通していないのかもしれない。

17世紀初頭に出版された『ドン・キホーテ』は、当初から滑稽本としてばかりではなく、高度の知性に彩られた小説として高い評価を受けていました。また、セルバンテス自身も、騎士道に代表される古き悪習を風刺し、それらに終止符を打ったとして、批判精神を高く評価されるようになっていきます。さらに19世紀になると、ドストエフスキが『ドン・キホーテ』を「人類の天才によって作られたあらゆる書物の中で、最も偉大で最も悲しい」と評したように、ドン・キホーテの感情を尊重した悲劇的な解釈が主流になっ

ドン・キホーテ

前編(一)

セルバンテス作/牛島信明訳



赤 721-1
 岩波文庫

『ドン・キホーテ』
 セルバンテス 作
 岩波文庫

たようです。そして現在では、カーニバル文学として高く評価されています。

なぜ今、『ドン・キホーテ』を読んでもみようと思ったかと言いますと、数年前の小児腎臓病学会にオリジナルな演題を出し、この世界における自分の終焉を悟りました。

そして趣味の世界でも唯一残されていたゴルフが下手になったのです。ゴ

ルフをやめてしまおうと何も残らなくなる恐れがあるのです。

このような状況で、ゴルフに対するモチベーションを維持することが私にとっては極めて重要になりました。そして、最後にすぎたのが『ドン・キホーテ』でした。初老の郷土が妄想をどのように維持して、冒険を続けていくことができたかを参考にしたいと思いました。

風車を巨人と、羊の群れを軍勢と思いつい込んだことについて、ドン・キホーテは、巨人と戦い、大軍を撃破したのにその成果に魔法使いが嫉妬して、巨人を風車に、大軍を羊の群れに変えたと妄想します。そしてすべて魔法使いのせいにしてしまうことで理性とのバランスをとっているのです。このため負け続けても、敗北からダメージを受けないで済むのです。つまり自分は準備を整え、成果を上げているのに、魔法使いに邪魔されて周囲に喜劇にしか見えなくなっている、とするのです。

このような妄想的な有能感、老人ばかりではなく自信をなくした人、病気から立ち直れないでいる人にも一つの生き方を示唆していると思います。

この本は人生の応援歌なのです。『ドン・キホーテ』をブロードウェイ・ミュージカルに仕立てた「ラ・マンチャの男」では、「叶わぬ夢を夢みて、届かぬ星に手を伸ばす」と歌い上げています。

村上睦美

むらかみむつみ
 日本医科大学名誉教授

1939年生まれ。日本医科大学卒業。1974年以来、学校検尿一途に44年。日本医科大学教授、日本小児保健学会会長、日本小児腎臓病学会理事等を歴任。